THE JOURNAL OF ISLAND STUDIES
Vol.17, No.2 August, 2016

CONTENTS

【Articles】
The Approach of Geotourism in Mishima Kikai Caldera Geopark, Kagoshima Prefecture, Japan
FUKAMI Satoshi (131)

Consideration of Economics about the Market of an Island
that is Effected by Remote Island Bridging:
In Order to Regain the Lost Market after Crosslinking
KURONUMA Yoshihiro (151)

【Research Notes】
An Introduction of Nisology (4):
In Search of the Appropriate Sustainable Island Technology
KAKAZU Hiroshi (167)

THE JAPAN SOCIETY OF ISLAND STUDIES (JSIS)
三島村・鬼界カルデラジオパークにおける
ジオツーリズムの取り組み

深見 聡
（長崎大学）

キーワード：三島村・鬼界カルデラジオパーク、ジオツーリズム、
小規模島嶼、ゲートウェイ機能

I はじめに

1. 問題の所在

現在、筆者の主な研究分野は観光地理学であるが、学部は地理学部地学科を卒業したこともあって、地学巡検の身近なものとしてとらえてきた。このことから、日本においてもジオパークの議論が持続可能な地域づくりやツーリズムといった内容と関連づけて議論がなされている点に、大いなる関心のまなざしを向けている。近年では、着地型観光の新たな形態として、ジオツーリズムを含む用語が知られるようになり、グリーンツーリズムやブルーツーリズムなどとならぶオンラインツーリズムの一つとして位置づけられるようになった（平野 2008；横山編 2014）。

一方で、筆者自身、毎年度大学の講義でジオパークやジオツーリズムについて取り扱っているが、学生たちの多くはその名称を聞いたことがある程度の知名度にとどまっている。これは学生に限ったことではなく、ジオパークをはじめとする活動が広く住民レベルにまで認知されているとは言いがたいとの社会的動向を反映しているものと思われる（河本 2009；深見・大久保 2014）。日本におけるジオパークの地域の現場における浸透や学術的な議論の深化は、今日までは正念場にあるといえよう。その際、観光学分野における研究の蓄積が不可欠であるが、日本におけるジオパーク研究の多くは地質学や地盤工学といった、いわゆる地学およびその関連分野からのアプローチによるもので占められてきた。結果として、ジオパークやジオツーリズムが持続可能な地域づくりの有力な手法としてどのように位置づけられ、今後の展望が描けるのかという視点からの研究は手薄なかまに今後
至った。
2015年9月現在、日本国内にジオパークとして認定された地域は39地域を数える。そのうち、2009年8月に洞爺湖有珠山・赤魚川・鳥原半島、2010年10月に山陰海岸、2011年9月に室戸、2013年9月に隠岐、2014年9月に阿蘇、2015年9月に阿波の5つが世界ジオパークの認定を受けている。ジオパークとしては「生態学的もしくは文化的な価値のあるサイト」をふくむ「ただの遺産」（ジオサイト）の保存や保護をすすめるに、ジオツーリズムや環境教育をとおした持続可能な地域づくりが指向されており、今後、認定数が増えるにしたがって、日本国内での認知度高まっていくと思われる。
さらに、2015年11月の第38回国連ユネスコ総会で、ジオパークのユネスコ正式プログラム化に関する件が可決され『国際地質科学ジオパーク計画』（International Geoscience and Geoparks Program; IGGP）』としてユネスコの正式事業となったことで、その加速化は増していくものと思われる①。日本でも毎年ジオパーク認定地は増加しているが、欧州や中国といったいわゆるジオパーク先進地とされる地域の事例に学び、質の高い日本型のジオパークのあり方を模索していく必要があるだろう（渡辺 2014）。
その際、日本のジオパークの多くは、過疎がすすむ条件不利地域に分布していることに留意する必要がある。そのなかで、より条件不利とされる小規模島嶼の複数の認定を受けている点は特徴的である。前述の「隠岐」や、日本ジオパークに認定されている「伊豆大島」、「大東御所浦」、「おおぴた島」は、いずれも少子化や高齢化にともなう過疎化の進行が著しい。それらの島々では、地域ならではの自然資源や人文資源をジオサイト＝「ただの遺産」と位置づけ、それらを活かすというジオツーリズムに取り組むべくジオパークの仕組みの導入を図っている現状があり、認定後は知名度の向上に関して一定の成果がみられることが報告されている（川辺・丹 2012；林ほか 2013）。
ところで小規模島嶼においては、その地理的特性から生じる固有の課題も指摘されてきた。とりわけ、離島振興策として多額の公共投資がおこなわれ、港湾・道路・集会所といったインフラ整備をはじめ、大都市圏の大手資本などによるリゾート開発がすすめられた事例も多い（山田 2004；深見 2011）。にもかかわらず、それらの多くで当初期待された経済効果をはじめとする条件不利の克服につながった事例は寡聞にして聞かない。むしろ、公共事業に依存した短期的な雇用創出という一時的、臨時的な経済効果に終始するという性格が色濃く、地域資源を活かした持続的なツーリズムの取り組みに至って昇華させようという視野の醸成にまで残念ながら到達していない（小林 2012）。

2. 研究の目的と方法
本稿は、ジオパークとは何か、そしてジオパークで展開されるジオツーリズムの特徴は何かを求め明確にすることを目的とし、真に実質の発展につながるための諸問題について検討をくわえようというものである。
第一に、ジオパークやジオツーリズムを推進していくうえで、他の種類のツーリズム、たとえば歴史観光や、ユネスコの正式プログラムという共通点をもつ世界遺産観光の特徴に言及しつつ、それらの本質に迫りたい。
三島村・鬼界カルデラジオパークのジオツーリズム

02年にヨハネスブルグで開かれた、持続可能な開発に関する世界首脳会議（ヨハネスブルグ・サミット）においてその重要性が再確認された。これに先かせて、2001年にユネスコが世界各地のジオパークに関する活動を支援していくことが決定されている。このような機運をうけ、2004年に世界ジオパークネットワーク（Global Geoparks Network；GGN）が誕生し、ジオパークに関する具体的な展開がなされるようになった。本ネットワークは、以下の6項目にわたるジオパークの定義を定めている。

①地域の地史や地質現象がよくわかる地質遺産を多数ふんふんだけでなく、考古学的・生態学的・文化的価値を有するものを探す
②公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画をもつ
③ジオツーリズムを通じて、地域の持続可能な社会・経済発展を育成する
④博物館、自然観察路、ガイド付きツアーなどにより、地球科学や環境問題に関する教育・普及活動をおこなう
⑤それぞれの地域の伝統と法に基づく地質遺産を確実に保護する
⑥世界的ネットワークの一員として、相互に情報交換をおこない、会議に参加し、ネットワークを積極的に活性化させる。

GGNへ加盟することで、世界ジオパークを名乗ることができ、その審査には上記の観点をふまえられる。加盟後は4年後に1回の活動状況等の評価（再審査）があり、場合によってはGGNからの認定取り消しもあり得る。その
傘下に、日本ジオパークネットワーク（Japanese Geoparks Network；JGN）などの組織が国ごとに設けられている。世界ジオパークを目指すには、まずは国内のジオパークネットワークに加盟することが事実上の第一関門となる。

ジオパークの定義からは、「生態学的もしくは文化的な価値のあるサイト」も含む、広義の大地の遺産ともいうべきが読み取れる。また、保全にとどまらず、「ジオツーリズム」をとおした「持続可能な社会・経済発展」を標榜しており、保全を主目的とする世界遺産とは一線を画している。

2015年9月現在、33か国に120の世界ジオパークが誕生している。地域別には、とくに欧州と中国に多い。また、JGNが認定する日本ジオパークは前述のとおり39地域に、他の準会員（日本ジオパークの次期認定の候補地）に三宅島や土佐清水など16地域が名を連ねている。日本ジオパークを名乗るには、世界ジオパークの場合と同様に、JGNへの加盟が条件となる。JGNが示したジオパークの定義のもとづき、日本版ガイドラインが日本ジオパーク委員会（Japan Geopark Committee；JGC）により策定されており、これにもとづき審査がおこなわれる。

2. ジオツーリズムとは

これまで述べてきたように、ジオパークは、住民主導やツーリズムによる持続可能な社会の指向性、その間に「大地の遺産」を切り口とした幅広い環境問題への教育・普及の重要性がうかがわれている。そしてジオパークの成否は、持続可能性という観点に立てば、ツーリズムの役割が欠かせない（Newsome & Dowling 2006）。

渡辺 2008）。そして、ジオパークにおいてとりわけ重要なのが、ジオツーリズムである。このなかでは、地球科学的な見どころ（ジオサイト＝大地の遺産）について、地球科学的なプロセスを学ぶことを柱として、考古学・生態学・文化的な価値も遺産の対象としてあつかう（図地ほか 2011；新名 2013）。また、ジオツーリズムは静態的な存在にとどまらない、もまた大きな特徴である。景勝地や博物館施設を単に「見る」のではなく、「大地の変動が繰りなせて形成された景勝地のストーリーを知り、博物館施設で大地の遺産の全体像を学び、追体験することでその恩恵に浴する」といった動態的なフィールド活動である（小泉 2009）。

ジオパークの定義には、持続可能な地域づくりの仕組みの一つとして、地球科学を切り口としつつもそれを基盤に展開される地生態学的な地域資源を活用するジオツーリズムの取り組みの重要性がうかがわれている。すなわち、ジオパークの成否は、ジオツーリズムの定着に懸けていると言っても過言ではない（岩田 2012）。

ジオパークの仕組みが登場する以前の1990年代半ばから、ジオツーリズムという用語が欧州で登場しその定義が試みられてきた。それから2000年代半ばになって、もともと地質学者によって、ジオツーリズムが「単なる地質現象の見学や化石採集」ではなく、自然により形成された景観を地球科学的な正しいプロセスで知り、それら「地球の遺産を、経験し、学び、楽しむための旅行をする」ものであるという位置づけがなされていった（横山 2010）。最近でも、「地質と景観に注目した自然地域ツーリズムの一環であり、ジオサイトへの旅と地質多様性の保護、および地球科学への理解を促すもの」（矢解と示すものもみられる（Farsani et al. 2010）。
以上の内容は、ジオツーリズムの主要な面を的確にとらえているといえよう。

ところで、この間、ジオパークの議論がユネスコで徐々に深まっていく過程において、「単
に地学的な重要サイトを集めるのではなく、地
質学とは関係のないテーマであっても、自然地
理学、生態学、考古学、歴史や文化なども考慮
されるべき地域」とされ、「地域住民の暮らす
環境や文化、遺産などを含む地理的な特徴の学
びを深め保全につなげる」ものであるという。
自然環境と人文環境（人間環境）のかかわりを
強調した考え方も登場した（Boley et al. 2010；
小泉 2011；深見 2013a）。このことを河本
（2011）は「Geo as Eco」と表現し、ジオツーリ
ズムを「地球科学的（地学的）資源を主たる
対象とするエコツーリズム」ととらえることを
提唱しているが、筆者もこの考えは妥当と考え
る。すなわち、「エコ」は生物、非生物にかか
わらず自然環境全般を包括的にとらえるもので
あり、「ジオ」は地質や景観を対象としつつ人
間がそれらとかかわってきた「大地の遺産」と
してストーリーを構築していくことが重要とな
る。

このように、ジオツーリズムは「単なる地質
現象の見学や化石採集」ではない。「貴重なな
あるいは重要な地質・地形学的景観を保全してい
る地域における、その景観や環境を損なうこと
のない持続可能なもの」である（横山 2008）。
そして、子どもから大人数までの多世代にわたり
学びの場やガイドなどの人材育成の機会につな
がるといった可能性を持つジオパークという場
における、地域の多様な特性を反映したジオサ
イトを活用することがその本質なのである（目
代 2014；熊谷 2015）。

3. ジオパーク、ジオツーリズムの抱える課題

ジオパークは、オンラインツーリズムが展開
される比較的新しい仕組みである。そして、地
球科学的な見ところで、考古学・生態学・文化
的なものも含めてジオサイトと位置づけ、そ
の価値を保全・活用するという特徴をもってい
る。そこで、ジオパークにおいてジオツーリズ
ムを展開する際の課題について言及しておく。

第一に、ジオパークで扱う広義にわたる地球
科学分野には、聞き慣れない専門用語や地質年
代の時間スケールにより複雑な印象を観光客が
抱く可能性がある（目代ほか 2012）。たとえば、
歴史観察の場合、地域史・生活史や人物・建築
意匠といった対象がもっと物語性が観光客をひき
つける。大河ドラマの誘致合戦がいつまでも地
域に広がっていることをみるとても（深見 2009
a；2013b）、歴史という対象はツーリズムにお
いてメジャーな存在といえる。一方、地層や岩
石は一般的にマイナーな存在であり、いくら学
術的に意味のあるジオサイトであっても、予備
知識なしに専門用語や地質年代を駆使した解説
をうけても観光客は満足感を得られない。筆者
自身、理学部地学科卒業であるが、当初は「柱
状節理」や「斜交薬理」などの地学現象を立体
的にイメージするのに苦労した記憶がある。

さらに、歴史観光の場合、たとえば人気の高
い近世であれば約数百年をかかのぼっての話題
展開となるが、地学現象の場合、数百万年や何
億年前といった時間軸の幅が大きく、歴史の場
合にくらい観光客が在時をイメージするには、
相当な理解力を求めることになる。

これを解明するには、地学や自然地理学など、
ジオサイトに専門的な立場から携わっている研
究者・学芸員・行政職員などがファシリテータ
となり、観光ボランティアガイドといった地域
住民を中心とするジオパークの直接の担い手たちを丁寧に育成していくしか道はない。そのために、ファシリテータが、まずは分かりやすく、魅力的な態度で担い手と継続して接していくことが求められる（深見・井出編 2010）。

次に、世界遺産として認定のジオパークはユネスコの正式プログラム化を契機に、より外部からの高い評価を得なければならない。地球科学的な価値の保全に、専門家の存在は不可欠である。ところが、その意義を地域社会で共有しなければ、持続可能な保全・活用にはつながらない。さらに、外部からの「お墨付き」を獲得することは、地域にとってジオツーリズムの活動を加速させる効果が期待される。同時に、地域社会が、地域がジオパークに認定されることや、ジオツーリズムが展開されることについてどのような意識を有しているのか、また、それらがどのように反映されてきたかを整理する必要がある。

ジオパークは、「公的機関・地域社会ならびに民間団体によるしっかりした運営組織と運営・財政計画」を定義に掲げている。すなわち、地域社会と行政・NPO 法人（特定非営利活動法人）など民間団体の協働が前提として整っている必要が、住民の意識に浸透の差こそあれ、少なくとも、ジオパークやジオツーリズムに対する普及活動が生まれ、そしてジオツーリズムを轴に持続可能な地域づくりをすすめていく意識喚起がなされる必要がある。この過程を急ぎすぎると、地域社会の「押しつけ」や「ハリ経済は難しい」といった印象を植えつけてしまうことになりかねないため、注意が必要である。

III 研究対象地の概要

1. 鹿児島県三島村および硫黄島の概要

2009年7月22日午前、国内では46年ぶりとなる昼食時が観測された。種子島・屋久島から駆逐艦列島（鹿児島県打島村）、奄美大島北部では日にちにく屬天候に見舞われたが、これらの島々への多くの来訪者があった。実はこのとおり、これらの島々はキリスト教が入ったもので、鹿児島県打島村を構成する有人3島（竹島・硫黄島・黒島）はあまり注目されなかった。駆逐艦列島と同じく、村営フェリーの1日1便往復運航の確立までに至らず1）、他のインフラ等において圧倒的に条件不利な地域がおかれている（これらの島々に、388人（2016年2月1日推計人口）の人々が暮らしており、65歳以上の高齢者が30%を超える典型的な過疎地域である（図1）。これまで、中央の関連プローチに発表がなされたことはあるものの、持続可能な観光を求める議論は乏しかった。

三島村は、1955年、岩波写真文庫シリーズの一つとして『忘れられた島』が刊行されて以来、有吉佐和子作『私は忘れない』（1959年の朝日新聞連載小説、翌年松竹が映画製作）、硫黄島での中村勘九郎（故・18代目勘三郎）による奉
三島村・鬼界カルデラジオパークのジオツーリズム

納歌舞伎（1996年、2011年）がおこなわされたことで知られる。一方で、同じ鹿児島県内に住む人びとの間でも、映画『硫黄島からの手紙』の舞台となった太平洋戦争の激戦地・東京都小笠原村の硫黄島と混同して認識されているケースもみられる。本稿の研究対象である三島村・鬼界カルデラジオパークのエリアのうち、中心に位置づけられている硫黄島は、人口128人（2015年12月1日推計人口）の小規模島嶼である（図1）。村内には高校がなく、また、雇用の場に乏しいため、人口減少に歯止めがかからない。

一方で、2001年度に国土交通省鹿児島振興課が刊行した『離島の総合交流支援事業調査報告書』によれば、自然環境や景観の持続観光資源としての価値はトップクラスの評価がなされている。村役場自体も、「他に類のない手つかずの自然の美しさ」が村の観光を特徴づけることを認識しており、とくに硫黄島の場合、活火山・硫黄岳や、東温泉、大名竹やツツジといった山の幸や石割といった海の幸に恵まれている。すなわち、これらを「大地の遺産」と位置づけるジオパークの仕組みが有効に機能する潜在可能性は高いと考えられる（谷川2003）。

硫黄島観光対象として注目を集めたきっかけは、1974年に三島村が誘致した（株）ヤマハリゾートが営業足場を撤退したことにより求められた。南国の自然を売りとし、併せて飛行場も開設し、1972年に沖縄が日本に復帰を影響もあり、1982年に事業撤退という事態に追い込まれた。現在、飛行場は日本初の村営飛行場として鹿児島空港との間に新日本航空（JNA）による週2便の定期チャーター便が運航しているが、住民や観光客の島と鹿児島県本土との往来のほとんどは村営フェリーが担っている（大岩根2014）。

三島村全体での年間観光客数は、この数年は4,000〜7,000人台で推移している。人数自体に極端な増減はみられないものの、鹿児島県旅行業協同組合による着地型観光の取り組みである「みしまにあんプロジェクト」を2012年6月に開始されるといった新たな試みもみられる。

2. 三島村・鬼界カルデラジオパークの概要

本ジオパークは、2012年4月に当時の日高市村長の発案により三島村ジオパーク推進協議会が設立され、翌月にJGNの準会員となったことに端を発する。この中、正式に日本ジオパーク、世界ジオパークの認定を目指す地域としてのスタートを切った。その際、協議会が掲げたコンセプトは、次の4点である。

① 離島自治体が目指す世界最小のジオパーク

② 世界初の海底カルデラジオパーク

③ 破局的噴火を起こした新の大海底カルデラ

④ 初期地球環境の復元モデルの場

これらにくわえ、僧俊寛や安德天皇に由来する歴史遺産、各島に伝わる太鼓踊りなどの民俗遺産、かつて硫黄を採掘していた痕跡の残る産業遺産などの文化、各島にみられる大名竹林や硫黄島の温泉、黒島の森林植物群落などの自然に代表される地域資源を活かし、特産品の開発や発信、民宿施設の充実等を推進することとなった（写真1・2）。

同月には、硫黄島にある三島開発総合センター内に本構想のコンセプトの中心に位置する鬼界カルデラのジオラマや映像、資料館を見学できる鬼界カルデラ博物館がオープンした。ここは、本構想を地域住民や観光客を対象に普及啓
発していいくジオサイトのうち拠点施設に位置づけられている（写真3）。

写真1 恋人岬からのぞむ硫黄岳（2015年9月7日筆者撮影）。

写真2 硫黄島中央部にある俊観堂（2015年9月7日筆者撮影）。

写真3 鬼界カルデラ博物館（2015年9月8日筆者撮影）。

準会員となった2012年6月に開催された定例村議会の一般質問では、ジオパーク認定に向けた取り組みに関する質問が2件出され、今後の方針として「村民へのジオパークへの理解を進めるための活動に、研修会の開催、ジオガイドの育成、ジオパークツアーを開催」を通じて、ジオパークの意味や意義が村民に伝わっていくように努める方針が打ち出された。

2013年9月には、他に類のない手つかずの島、無垢の風景－三島村をジオパークへ－と題した本構想に関する初の観光パンフレットの刊行（図2）、10月にはジオパーク担当の地球科学研究専門職員として環境学の博士号を有する大岩根尚氏を採用し、本格的に日本ジオパーク認定に向けた取り組みが開始された。

そのなかでも、竹島・硫黄島・黒島を船著上から眺める日帰りという行程の「ワンデークルーズ」や、硫黄島産の硫黄を使って花火を作る体験ツアー、同じく硫黄島産の珪石を使った磯子細工体験ツアー、シーカヤックは人気を集めていいる39。2014年7月には三島村で初めての観光案内所も硫黄島に開設され、個人や小グループのニーズに対応した情報提供に努めている。それらの活動をまとめて公開したり、島の日常を紹介したり、各種イベントの告知や宿泊先の案内などをおこなう総合サイト「GO! MISHIMA」が2014年7月に開設され、観光客にとって有益な情報を発信し続けている40。

これらの活動実績をもとに、2015年4月、JGNに日本ジオパーク認定のための申請書が提出され、同年9月に認定された。JGNは、①素材が素晴らしい、伝える努力をしている、②研究サポート体制が整えられている、③旅行会社と連携し、島の若者と一緒に取り組んでいる、といった点をとくに高く評価した41。
図2 「三つの島のジオとみどころ」マップ
(観光パンフレット『他に類のない手つかずの島、癒しの風景ー三島村をジオパークへー』
(2013年9月、三島村役場刊)より転載)。

IV 三島村における聞き取り調査

1. 調査実施概要
筆者は、2013年9月6日から8日、12月21日および2014年12月17日、2016年2月3日から4日までの2回、スカイプをもとに聞き取り調査をおこなった。対象者は、それぞれ役場職員および住民に設定した。役場からは、村長の日高顕士氏(当時)、大山秀人氏、大岩根尚氏に応じていただき、住民からは硫黄島出身で退職後、Uターン移住した60歳代男性と、Iターン移住者である20歳代女性、竹島在住のUターン移住者である30歳代男性の3名が応じた。聞き取りにあたっては、非統制的な自由な発話の収集に努めたが、対象者本人の「自分史」の内容と、客観的事実として登場した本ジオパークに関する内容を大別し記録していった。得られた発話のうち、本稿の調査目的に沿った内容について、文脈を損ねない範囲で抽出し整理した。その結果を次節に記していく。

2. 調査結果
1) 自治体の意識
1970年代に進めた大型リゾート開発が頓挫した経緯があり、また昨今の観光形態の変化から、島そのものの特性を最大限に活かした地域づくりに徹したいと考えている。つまり、島には島の生き方が、やり方がないのでないかという原
点を大切にしたい。その際、観光地として注目
してもらうにはジオパークの仕組みやジオツー
リズムは最適と考えられる。この仕組みを村
長が知ったのは、2010年に新潟県佐渡市長が、
みしまカップレースに参加した際に紹介
されたのが始まりであった[119]。同様に島嶼であり、
地域活性化のあり方を模索していた村役場は、
村長のリーダーシップのもとで、ジオパーク認
定へ活路を見出すことにした。

村を訪れる観光客の人数は、懸念され
るほど減少したわけではないかもしれませんが、見て
増えていっているという認識もない。行政と
しては産業の創出のために観光客（島を
訪れる人）がいは島に移住する人の
増加を企図している面もある。つまり、
観光が地域に産業の創出をもたらすこと
を意識しないと、持続的に地域が枯らさ
たものにはならないと考えている。当然
ながら、ジオツーリズムを展開するには、
ガイド制度の整備など受け入れ体制の確
立に努め、地元にお金が落ちるようにし
たい。ジオパークの定義のなかに、地域
経済の発展が掲げられていることもあり、
この仕組みに挑戦する価値はあると判断
した。

ジオパーク構想の段階で、すでにジオ
サイトとして位置づけているのは、自然
環境に由来するコンテンツ（海底部を含
む鬼界カルデラの活動等）と人間環境に
由来するコンテンツ（仮面舞踊を代表
される信濃舞・平家ゆかりの歴史、独特
の民俗行事、硫黄岳の産業遺産、アフリ
カの太鼓・ジャングルについて学べる日本
唯一のスクール事業等）など、硫黄島だ
けで例にしても多くの地域資源が存在す
る。これらをジオの視点から活かしてい
くためには、住民にまずはジオパークに
について認定後もよく理解してもらう機会
を地道に設けていくことを重視している。

ジオパーク認定に向けた、人的・組織
的な体制づくりは小規模島嶼の小規模自
治体である本村の場合、決して容易な道
ではなかったが、地域資源の価値につい
ては地質学的にも歴史学的にも学識経験
者から一定の評価を獲得しており、今後
は日本ジオパークとしての基準を一つ一
つ維持していく（ジオパークの仕組みを
活かした地域づくりの実績を重ねていく）
ことに力を入れていきたい。宿泊施設の
整備や船舶航路および島内の移動手段
（とくにレンタルカーやレンタサイクル等）
の利便性の確保など、課題も多いが、自
治体としては地球科学研究専門職員を
中心としてジオツーリズムを成熟させてい
きたい。また、認定されたことをゴール
とするのではなく、そこからスタートす
るという認識を強くしている。むしろ、
ジオパークという仕組みへの可能性を住
民挙げて考えていく成果が重ねられること
が重要であり、住民とともに理解取
り組みを重視したい。住民へのジオパ
ークの浸透度は村広報誌や博物室の開設。
モニターやの実施等で徐々に高まり
つつあり、認定されたことでその度合い
もさらに高まったと感じているが、まだ
十分とは言えない。“一番小さな村の世
界一小さなジオパーク”を標榜し、引き
続き情報発信をおこなっていきたいと考
えている。

ワンデークルーズについては、航路の
三島村・鬼界カルデラジオパークのジオツーリズム

2）住民の意識

A氏：60歳代男性（Uターン移住者）

A氏は中学卒業後に硫黄山を離れ、鹿児島市内の高校を卒業後に鹿児島市内で就職した。
退職を直前に控え、このまま鹿児島市で暮らすことも考えたが、現役時当たり前就業の機会の心配が要らず、退職後も進む故郷への愛着から何かできることはないかという思いからUターンを決意した。

ジオパーク導入の動きについては、この小さな島にとってプラスになると考えている。各地から研究者が訪れており、特に最近では2013年7月に鹿児島市で開かれた国際火山学・地球内部化学学会学術総会の現地調査地に選ばれ、硫黄山に国内外の研究者がグループが訪れたりするのを見ていて、ここが世界的に注目される地であることが理解できた。

一方で、ジオを観光と結びつけるという視点は、これまでにも国の補助事業などで観光の取り組みを促進する試みが行われたものの、いずれも決して手にかけ、定着するまでに至らなかった。そうして産業のほか、とくに目立った産業もなく、やはり観光業に力入れる必要があると感じている。

間、島民の高齢化が進み、今日では観光を地元で担い得るのかさえ不安視している。もちろん、見どころとなる地域資源は手っ取りのままの魅力にも付されていると思うが、それを活かし支える住民数が手薄になったことに危機感を抱いている。規模は大きくなくとも、兼業でガイドをしたり、民宿・民泊を問い合わせる制度の確立が最重要課題であろう。

ジオパーク導入の話も、自治体主導で
あったことから住民にとっては唐突感があった。三島村役場の出張所は各島にあるものの、本庁は鹿児島市に位置するため、行政との距離感を覚えることは否めない。ジオパーク導入に限らず、そういった感覚を抱いてしまうのはやむを得ない面もあるが、ここまできちんと、広域化・過域化がすみざる集落化も近い状態であれば自分たちでできることは自分たちでやり、行政にももっと一貫性をもって観光施策をすすめてほしい。その意味でも、ジオパークに期待しているが、島民の一体感の創出は小さなコミュニティであるがまだ不足しているので、自地域にどんな寄りがあるのかを外部の方も借りてしっかり周知していく必要がある。

②B氏：20歳代女性（Iターン移住者）
B氏は首都圏出身で大学卒業後に首都圏の企業で勤務していた。このまま勤務を続ける選択肢もあったが、総務省の「地域おこし協力隊」に応募し、硫黄島にIターン移住した新住民である。

もともと農業など地域づくりに関わることに興味を持っており、一念発起して協力隊の制度に挑戦した。Iターンでしかも期限付きの移住といえども、最初は自身がのびのびと暮らしづつし、島民のために役立つ活動を見つけてくれたらと考えている。まずは、自身の日々の様子を定期的にブログなどで情報発信している。

ジオパーク導入の動きについては、大きな可能性を感じる。緑ゆかやもいない立場で島に暮らすようになり、何といえども衝撃的だったのは、活火山・硫黄岳や各所に湧く温泉、鬼界カルデラが形作った数々の絶景の存在であった。一方で、新たな特産品として樹油を原料とした石鹸や食用油などの生産販売、ジャンクスケール化を、八園飾りなど歴史ある民俗行事といった、自然環境や景観だけではない地域資源の豊かさに驚かされた。

A氏のように、できることはやっていきたいという住民も存在する。民宿のなかには地元で採れた魚介類や山菜、筍などを利用した創作料理を提供するもてなしの工夫を図る事例もみられる。

一方で、とくに首都圏の人間だから思うかもしれないが、次の二点が気になっている。一つは、地域資源を活かすことで小規模でも経済的循環を創出しようとという共通認識が行政と住民の間であまりみられない点である。二つ目は高齢化・過域化によって、ジオパークであっても観光産業を興そうとするには、島民だけではマンパワー等さまざまな面で簡単にはうまくいかないと感じる点である。これらはジオパークに限った問題ではないが、小規模な離島であるこの硫黄島のように狭いコミュニティの場合、共通認識の形成はしやすいかもしれないが、一方でそこに至るまでの意識改革や動機づけといった事前の地道な活動の蓄積にかなり慎重な経験をたどる必要性があると思われる。

私のようなIターン者は、むしろ地域のなかで色のついていない存在として活用してもらえるような雰囲気が高まっていくと、島内外の協力や連携も築きやすいと考える。

③C氏：30歳代男性（Uターン移住者）
C氏は中学卒業後に竹島を離れ、鹿児島県内
の高校を卒業後に首都圏で就職した。その後、結婚を契機に子どもたちを故郷の自然のなかで育てたいと考えた結果、Uターンを決意した。

もとよりIT関係の仕事をしていたが、UターンしたのをきっかけにITも活かして地域の活性化に役立ちたいと考えるようになった。村の定住促進対策事業を利用しUターンしてから数か月後に大岩根尚氏と出会い、はじめてジオパークという仕組みについて知った。当初はとくに研究に関する話題については敏感なイメージがあったが、徐々に地域資源を活かすためにはどのような工夫が必要かを考えるようになった。とくに、日本ジオパークに認定されたことでこの仕組みをうまく使ったたる大名竹をを使った特産品の開発などを力入れはじめた。

ジオパーク認定の前後で、竹島を訪れると観光客数は著しく増加している。しかし、「ワンデーケルーズ」のようなツアーをとおして、まずは竹島を知ってもらい、硫黄島・黒島とともに各島にある魅力を感じ取ってもらえる機会を増やすことを期待している。今後は、竹島の人口増大（2016年2月現在79名）を考慮し、身の丈に合った観光客の受け入れや特産品づくりを意識したい。このことが、結婚として持続可能な地域づくりにとってプラスに作用すると思われる。

V 考察—三島村・鬼界カルデラジオパークのこれから—

ここまでの、ジオパークおよびジオツーリズムの本質をふまえたうえで、条件不利地域に多く展開されている日本のジオパークの特性を理解し、小規模島嶼におけるジオツーリズムの確立可能性について、三島村・鬼界カルデラジオパークを事例に聞き取り調査をすすめてきた。

その結果、ジオツーリズムはジオパークにおいて展開される持続可能な地域づくりの手法として重視されていることがわかる。しかし、実態はそもそもジオパークやジオツーリズムが何を対象とするのかという「大地の遺産」をめぐる議論と、小規模島嶼にジオパーク構想をすすめていくときに、自治体と住民の連携をはじめ、多様な主体の連携以前に、高齢化・過疎化、狭いコミュニティという条件を考慮した取り組みの蓄積がなされる必要性の存在が浮かび上がってきた。この点に関しては、以下のように整理することができる。

自治体と住民のいずれも、ジオパークの仕組みや三島村・鬼界カルデラジオパークの認定に対しては、新しい地域資源の活かし方としての可能性を見出している。この点は、日本国内においては複数の小規模島嶼で日本ジオパークに認定された地域が誕生しており、小規模島嶼という地理的条件のもとでもさまざまなジオツーリズムの取り組みがなされていることから、三島村・鬼界カルデラジオパークにおいても同様の展開可能性の存在が示唆される。

また、三島村を訪れる観光客数は、近年では4,000～7,000人台で推移しており、過去の統計においても年間で1万人を超えたことがない。

これは、誘客不足の結果ととらえるのではなく、むしろ、現状の交通手段や宿泊の受け入れ可能な適正な数値をとらえるべきであろう。さらに、ジオパークの定義からすれば、小規模島嶼では空間的完結性の高さから、ゲートウェイ機能としての有用性が期待できる。たとえば,
ジオサイトの保全や研究、環境教育の推進などに使途を定めた任意の協力金制度の創設も検討に値する。アミューズメントパークでは、入園料を対価として支払うのが当たり前であるのに対して、日本のジオパークではほとんどの野外のジオサイトへの立ち入りは無料である。小規模島嶼の場合、比較的従来対象者（観光客）の存在を捕捉しやすく、持続可能な地域づくりを指向するジオツーリズムをジオパークという仕組みのもとで展開する際に、観光客をはじめ住民にも意識の醸成を図るうえで大きな役割を果たすと期待できる。\(^{[3]}\)

また、①小規模島嶼であるがゆえに、もはや住民だけではないジオパークの仕組みを支えることが人類にも時間的にも制約が生まれかねない点、②かつて中央省庁による開発がなされたり、役場本庁が鹿児島市に置かれているため、自治体と住民との距離感は払拭しがたい状況がみられる。そのため、従来はどうしても観光の持続可能性を希望する議論が住民に定着しきれなかった。これら二つの課題については、速やかに克服を試みる取り組みを始め、ジオパーク認定の意義を高めることに努める。\(^{[4]}\)

①に関しては、移住者や協同組合、NPO 法人がすでに連携の動きをみせているが、それらの継続的な関係性の構築があつジオパーク導入の目的を達成する段階をのぼることができる。②に関しては、日本のジオパーク事務局（ジオパーク推進協議会事務局）の数は自治体が担っている。ジオパークやジオツーリズムについて知るきっかけが自治体主導となるのは、ほど珍しいことではない。大切なの、知ったあとは、実際にジオツーリズムに取り組む担い手が住民主導を指向していく点である。現在の動向にくわえて、ジオパークの認定前後から加速しつつある連携をさらに充実させ、島外の人びともメンバーにむかえ、地縁にとどまらない関心テーマ別のコミュニティ構築が、ジオパークやジオツーリズムを支える裾野を拡大させると考えられる（深見 2007）。そのため、島に暮らす“当事者”となる住民の理解は不可欠なものであり、その関係性の地道な積み上がなければ持続可能性が担保されないジオパークへの道をたどりかねない。この点の認識を、連携する関係各位で共有する必要がある（石川 2015：西谷ほか 2015）。

さらに、聞き取り調査の結果は、ガイドやガイド養成の場がそれらを促す役割を担うということを示唆している。これに関連して、豊野（2015）は伊豆大島ジオパークにおけるガイドへの調査から、「ガイドによるジオパーク活動は、地域住民が当地域を理解する契機となっており、彼らの地域アイデンティフィー性の醸成に大きく貢献していることが確認された。地域住民による「語り」はジオパークを発展させる潜在性を秘めていることを指摘した。すなわち、ガイド活動は観光客に自地域を案内する前に、「地元住民が自地域を知る」という重要な機能を提供してくれる。「大地の遺産」を綿と綿を綿してきた“当事者”である地域住民の存在は、ジオパークやジオツーリズムの前面に立ちたずともその主役として位置づけられる必要がある（深見 2009b；2014）。

以上のことから、地域の主体的な取り組みが基本とされるジオパークにおいて、理論上の可能性と同時に小規模島嶼にみられる人的規模の制約等の条件という現実との乖離をどうとらえていくのかを喫緊の課題ととらえ、引き続き三島村・鬼界カルデラジオパークにおける今後のジオツーリズムの展開について注視していく必
三島村・鬼界カルデラジオパークのジオツーリズム

要がある。

Ⅵ おわりに

本稿は、ジオパークおよびジオツーリズムの本質について論じたうえで、条件不利地域に多く展開されている日本のジオパークの特性をふまえて、小規模島嶼におけるジオツーリズムの確立可能性について三島村・鬼界カルデラジオパークを事例として検討をくわえてきた。

その結果、ジオパークとは地域が主体となって文化的な価値もふくむジオサイト＝地域資源を保全・活用することを目的とし、持続可能な地域づくりを具体化していく動的な仕組みであり、ジオツーリズムとはジオサイトの特徴を知りその保全意識の涵養へとつなげていく、地域が主体となった観光形態であることが明確になった。

三島村・鬼界カルデラジオパークを対象とした聞き取り調査からは、ジオパークに暮らす“当事者”となる住民のなかでも、前面に出して活躍するガイドや宿泊事業者と、その背後存在するジオパークやジオツーリズムへの理解を深める人びとの両輪のバランスがとれて初めて持続可能性が担保されることが把握された。とりわけ小規模島嶼という狭いコミュニティにおいて、人的制約も大きいなかでジオツーリズムの確立を図るには、ゲートウェイ機能の存在や、島外の支援者をふくむ担い手の連携を地道に積み重ねていく必要性が示された。

2014年3月、硫黄島の高齢者住民が中心となって、稲村岳に登山道を整備した。住民が主体となって地域資源の価値を見直し、観光客のためのジオサイトの一つとして活かしたいというこの取り組みは、ジオパークやジオツーリズムが住民の主体性を醸成する契機となるものとして特筆される①。まさに、ジオパーク構想の浮上や認定をとおして、地域に新たな主体性が生吹きはじめた好例といえよう。

ジオパーク制度はその認定地の増加に加えて、ユネスコの正式プログラムとなったことを背景として、今後、知名度の高まりが予想される。その際、先行してジオツーリズムの確立に腐心する小規模島嶼に位置するジオパークが、よき事例対象として脚光を浴びることを願ってやまない。

謝辞　鹿児島県三島村役場の日高部村長（2013年9月当時）、大山秀人氏、大岩根尚氏、同村役場硫黄島出張所の蒲原俊一氏、聞き取り調査に快く応じていただいた硫黄島・竹島の住民各位に厚くお礼申し上げる。

本研究をすすめるにあたり、2013～2015年度科学研究費補助金・若手研究（B）「担い手のライフヒストリーからみたジオパークの観光化プロセスに関する研究」（課題番号：25870520）を使用した。また、本稿の一部は、第6回国際ジオパークユネスコ会議（2014年9月、於：カナダ・セントジョン）および「持続可能な地域観光戦略の構築と価値に向けての地域人材育成および国際連携」公開国際シンポジウム・研究会（2016年2月、於：山口大学）において発表した。

注

1）今日では、たとえば長崎県地学学会が用いているように「ジオツアー」と呼ばれることもある。
2）2004年に設立されたNGOである世界ジオパークネットワーク（Global Geoparks Network : GGN）が主体となった制度であり、ユネスコは勧告等をおこなう支援団体という位置づけであった。
また、IGPP の日本語名称として、Geoscience を狭義の「地質科学」ではなく「地球科学」と訳したほうがジオパーク本来の意味を反映しているのではないかという声もあがており、その際には『国際地球科学・ジオパーク計画』との誤解を公式に使用してはどうかという議論がなされている。

3）2014年10月に天草ジオパーク（2014年8月認定）と合併し、現在では天草ジオパークを構成する地域（御所浦島・牧島など）となっている。

4）この点については、深見（2010；2011；2013a）の内容を近年の動向をふまえ筆者が再構成し記述した。

5）三島村の場合、村営船フェリーしまかせ鹿児島本港を起点として各島を結んでいる。2009年度より、1日1便の鹿児島県本土（鹿児島本港または枕崎港）への往来確保を目指した実証運航をすすめている。

6）両者がとも漢字表記では同じ「硫黄島」であるが、小笠原村硫黄島は「おいとう」、三島村硫黄島は「おいしうじま」と読みは異なる。

7）約7,300年前に発生した国内最大規模の破局的噴火で形成された海底火山。鬼界アカカヤ火山灰の堆積層から、九州の礁文ガラスが産出するほどの規模であったことが知られている。硫黄島はこのタルハ緑に位置する。気象庁ホームページによる。
http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/fukuoka/508_Satsuma-lojima/508_index.html
（最終閲覧日：2016年2月2日）

8）2015年8月24日付、同年9月4日付の南日本新聞記事によると。また、「ヒートデルタルズ」については、大岩根村村役場に実装したアンケートによると、参加者の76%が三島村という行先に惹かれて足を運んだこと。83%がガイド役を務めた大岩根村の解説に満足し、全体として80%以上の参加者が満足と回答していることからも、人気の高さがうかがえる。なお、本数値は、中間優布村（長崎新聞社）により2014年2月1日、2月2日、5月8日、6月7日の計4回の回答を合計して算出された。

9）本サイトは、竹島在住の山崎晋作氏（NPO法人しまますれ代表）をはじめとする有志が集い、「三島村の魅力をたくさんの人に伝えたい」という想いで運営されている非常利メディアである。
http://mishima.link/（最終閲覧日：2016年2月2日）

10）2015年9月20日付の毎日新聞記事による。

11）当時、佐渡島はJGNの準会員になった直後で、2013年9月に日本ジオパークに認定されている。

12）三島村役場の本庁は、1952年の三島村の成立以来一貫して、村営船フェリーしまかせ発着する鹿児島本港北に直結する鹿児島市港山町に置かれている。これは、いずれかの島に本庁を設けるより、行政機能の効率化が図られ、各島の住民にとっても鹿児島市のほうがアクセスしやすいといった事情による。

13）都市部から条件不利益地域に在住民を移し、生活の拠点を移した者を、自治体が原則として任期1～3年のあいだ「地域おこし協力隊員」として委任する制度。隊員は、地域の特産品づくりやPR、農業振興への従事といった「地域協力活動」をおこないながら、将来的には当該地域への定住・定着が期待されている。2015年3月現在、隊員の8割が20～30歳代、4割が女性が占め、任期終了後6割が同一地域に居住している。総務省「地域おこし協力隊の概要」ホームページによる。
http://www.soumu.go.jp/main_content/000580187.pdf
（最終閲覧日：2016年2月3日）

14）2013年9月8日におこなった三島村役場職員への聞き取り調査による。

15）ただし、観光客数の算定については、地域への入込数の把握方法で変化するため、ゲートウェイ機能を構築していく際には注意を払う必要がある。

16）JGN が2015年12月に作成した「JGN名簿」による。

17）2014年4月14日付の南日本新聞記事による。

文献
石川宏之 2015、復興まちづくりに火山災害遺構を活かすためのジオパークの総合と大学の連携体制のあり方に関する研究—島原半島ジオパーク推進連絡協議会と洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会を例として—、都市計画論文集 50: 101-106。
細野 友 2015、東京都大島町における自然ガイド活動の地域的展開、地学雑誌 124: 43-63。
岩田修二 2012, 「大地の遺産」の集合体としてのジオパークの視野、立教大学観光学部紀要 14: 5-17.
菊地俊夫・岩出修二・渡辺真人・松本淳・小出仁 2011, ジオパークと地域振興～一卷頭言～、地学雑誌 120: 729-732.
小泉武栄 2009, ジオパーク・ジオツーリズムによる地域振興と人材育成、地球 31: 541-549.
小泉武栄 2011, ジオエコツーリズムの提案とジオパークによる地域振興・人材育成、地学雑誌 120: 761-774.
河本大地 2009, ジオツーリズムで拓く地域づくりの未来、日本地理学会発表要旨集 76:12.
河本大地 2011, ジオツーリズムと地理学『地域多様性』概念一「ジオ」の視点を持続的地域社会づくりに生かすために一、地学雑誌 120: 775-785.
小林恒夫 2012, 玄界灘小島嶼社会の持続的展開条件（その4） 小川島を対象にして、Coastal Bioenvironment 19: 3-14.
新名阿夫子 2013, ジオパークとジオツーリズム、鳥取地学会誌 17: 3-10.
西谷久一・恒賀健太郎・塚内 悠 2015, おおい田姫島ジオパークにおける地域資源の活用と普及啓発の取り組み、ジオパークと地域資源 1: 27-34.
平野 勇 2008, 「ジオパーク地域遺産の活用・マスメディアツーリズムによる地域づくり」オーム社.
深見 聡 2007, 「地域コミュニティ再生とエココミュニティ協働社会のまちづくり論」青島社.
深見 聡 2008, 大河ドラマ 『新緑』効果と観光形態に関する一考察、地域環境研究 1:57-64.
深見 聡 2013a, ジオパークとジオツーリズムの展望ー日本と中国の事例からー、人文地理 65: 434-446.
深見 聡 2013b, 大河ドラマ 『風馬伝』効果と観光形態に関する一考察、日本観光研究学会全国大会学術論文集 28: 321-324.
深見 聡 2014, 「見せる・伝える・深める」をうまく進めるには、地理 59(12): 60-61.
深見 聡・井出 明編 2013, 『観光とまちづくりー地域を活かす新しい視点ー』古今書院.
日代邦康・菊地俊夫・渡辺真人・渡辺一徳・大野喜一・長谷義隆・鶴崎宏明・豊崎浩司・崎田博之・岩本薰・井村隆介・横山秀司・深見 聡 2012, 九州のジオパークの現状とこれから、E-journal GEO 7: 94-102.
山田 詮 2004, 南西諸島の経済振興策と経済学アプローチ、地域政策科学研究 1: 115-137.
横山秀司 2010, わが国におけるジオツーリズムの可能性に関する一考察、九州産業大学商経論集 50(2): 3-16.
横山秀司編 2014, 「ジオツーリズム論ー大地の遺産を訪れる新しい観光ー」古今書院.
The Approach of Geotourism in Mishima Kikai Caldera Geopark, Kagoshima Prefecture, Japan

FUKAMI Satoshi
(Nagasaki University)

keywords: Mishima Kikai Caldera Geopark, geotourism, small islands, gateway function

In this paper, the author have elucidated the features of geotourism that were developed in geopark had have argued that geotourism has been developing in disadvantaged areas. To consider the potential development of geotourism, especially with a focus on small islands, the author have collected speeches on this geopark from Mishima Village Hall office staffs and the residents using a qualitative technique of hearing investigation about Mishima Kikai Caldera Geopark.

As a result, it was suggested that the building community based on various themes has accelerated before and after the geopark’s registration. This was because island and non-island people worked together to gather support for the geopark and geotourism. As a prerequisite, it is essential to have the people living in the islands understand the meaning of the park because the lack of a shared understanding make geopark difficult to sustain. It is necessary to share this recognition with the organizations that collaborate with one another.

Furthermore, because the islands are small, they have a gateway function regarding the development of future geoparks amid limited human resources. Filling the gap in human resources is an important issue for future geoparks. Therefore, it is important for us to get a grasp of the process of future effort of geotourism in Mishima Kikai Caldera Geopark.